ジョーカーな狐と狸さん

ぺんぱるぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジョーカーな狐と狸さん

【Ｎコード】
Ｎ８９５１Ｚ

【作者名】
ぺんぱるぺ

【あらすじ】
隔離された世界。鬼と呼ばれる化け物とこの世界は密接な関係にある。鬼は人を喰い殺し、ときには、鬼は人に能力を与える。中央エリアの片隅に住む香宮司（こうぐうじ）　旧介（きゅうすけ）は、復讐相手を探し続けていた。そして、復讐相手とうりふたつの少女が目の前に現れる。少女は頬を赤く染め、小さな声で告白した。「あなたのストーカーです。大好きです、付き合ってください！」僕さま青年とストーカー少女のお話です。

狐さんの世界の終わり（前書き）

初めまして。

小説と言えるかも分からない代物ですが、お読み頂ければ幸いです。

狐さんの世界の終わり

その日、香宮司（こうぐうじ）　旧介（きゅうすけ）の世界は終わりを迎えた。何よりも大切で、陳腐な言葉を使うなら愛していたと表現しても良いような、掛け替えのない世界であった。

最後は笑ってしまうほどに呆気ないものだ。馬鹿馬鹿しいものでしかなかった。

それでも、そんなくだらない崩壊でしかなかったとしても、旧介には永遠のことに思えて仕方ない。

自慢の長い髪を優雅に揺らし、旧介の全てであった彼女は美しく微笑んだ。神がいるならば、彼女のような存在であるのやもしれない。そう思わせる程のものを彼女は持っていた。

すらりとした足が、ゆっくりゆっくりとこちらへ近づいて来る。旧介は逃げなかった。いや、正確に言うならば、逃げることなどできなかった。誰がこの状況で彼女から逃れられるだろうか。

旧介の身体はもうボロボロだった。腕は折れ、腹は切り裂かれ、激痛にただ堪えるだけしかできないような状態である。しかし、だからといって、旧介が無傷で体力も有り余っていたとしても、彼は逃げるなどという愚かな選択はしなかっただろう。

旧介の世界は終わったのだ。彼女は旧介の世界を作り上げ、慈しみ、そして破壊した。彼女がそうしたのだ。いや、彼女は彼女であって、彼女ではないのやもしれない。しかし、もうそんなことはどうでもよかった。

彼女は旧介を殺すだろう。簡単に、一瞬で全てを終えるに違いない。それはあまりに残酷であり、恐怖であり、そして何よりも幸福なことであるのだ。たとえ旧介がここで生き残ったとして、何が残

るというのか。何も残らない。なぜならば、それが香宮司　旧介であったからだ。彼女が居て、初めて彼は息をすることができる。

「お前は笑うのね」

鈴を鳴らしたような、澄んだ声音だった。

聞き親しんだ彼女の声は、こんな時でさえあまりに心地好く旧介の鼓膜を侵していく。

地面に倒れ込んだ旧介を真っ直ぐに見下ろす彼女は、どこまでも美しい存在だった。

「逃げないのか？私はお前を殺すのに。それは何があっても変わらないし、変えられない選択だ」

「逃げて、欲しいの、か？」

呼吸をしただけで苦痛に悲鳴をあげる身体を酷使して、どうにか声を紡ぎだす。彼女からの言葉を無視するなどできるわけがない。彼女を見上げ、旧介は笑いかけた。

それを見て、彼女は初めてその笑みを崩してしまった。不愉快そうに曲げられた眉も、軽蔑していることを何より物語る細められた目も、何もかもがただ美しく、愛おしい。

恍惚とした表情を惜し気もなく晒す旧介を一瞥し、彼女は『彼女』を演じることをやめた。

「……私は長生きしているからさ、人間なんてそりゃあ腐る程見てきたよ」

先程までとは何もかもが違う低い声と不機嫌に歪められた顔。もはやそれは彼女ではなかった。

「でもアンタみたいな気持ち悪いやつ見たのは初めてだ。最低最悪な気分になった、すげえ吐きそうだし」
「死ね」
「おや、やっぱり私じゃ優しくしてくれないのかな？そっちの方が似合ってるよ、アンタ」
「黙れ、カスが。僕はあの人にしか用など無いんだよ、早くくたばれ」
「素敵な言葉と憎悪だね、アンタやっぱりいいよ。そっちの方がかっこいいし、私のタイプだわ」

今までの心酔しきった感情は瞬く間に消滅する。今、旧介にあるのはは酷い憎しみと嫌悪感だけであった。
それは夢を見ていたようにも思えることだ。悪夢ではない。素晴らしく幸福な、死んでも覚めたくない、そんな夢である。しかし、夢は何があろうと夢でしかない。夢は終わる。旧介の世界が終わるように。無情なまでに、一切の慈悲もなく。
彼女はもう彼女ではない。彼女の姿をした化け物だ。化け物よりもっと酷いものかもしれない。旧介は彼女の皮を被ったそれを睨みつけた。それは愉快そうに肩をすくめるだけだ。

（殺してやりたい。いや、そんなもんじゃ足りないだろうが…。このカスが存在していたその事実を消してやりたい。それができれば、僕は笑って死ねるだろうによ）

旧介の目線を考慮したのか、そいつはしゃがみ込んだ。彼女の目から通されるそいつの視線は不快でしかなかった。
旧介は静かに目を閉じる。旧介が見たかったものは、彼女だけだ。あとは何もいらない。むしろ、邪魔な不要物でしかない。

「私はお前を結構気に入ってるんだよ、旧介」

「気安く、名前を、呼ぶな」

旧介と呼ぶことを許したのは、彼女以外にはいない。

「なあ、旧介」

吐きそうだ。

ねっとりとした重い声が身体にのしかかる。それは旧介を決して逃がしてはくれない。

「私を殺しにおいで」

からからとそいつが愉しそうに笑い声をあげる。

殺しに?行くに決まっているだろう。もはや傷の影響で声も出ない。それでも、旧介はそいつへの復讐を誓った。忘れたくとも忘れられない、最低の誓いだった。

「約束だよ、旧介」

そうして、世界は静かに崩壊を迎えた。何も残らない筈のその世界には、憎悪と殺意だけが暗く、しかし、確実に残っている。

殺してやる。そう息もなく吐き出したと同時に、旧介の意識は途絶えた。

狐さんと狸さんが出会いました

「大将、大将、起きましょーや……今日仕事でしょ」

低くしゃがれた声が鼓膜を突き破る勢いで侵入する。
また、瞼を閉じていても分かる程の眩しさに、旧介は不満げに唸り声を上げた。

熟睡していたからか、どうにも身体が重い。
もう朝であるというにも関わらず、睡魔はいまだに旧介を逃がそうとはしなかった。はっきりしない意識のまま、旧介は何とか瞼を開く。

瞬間、待っていましたとばかりに、視界を日光が埋め尽くした。

（……ねみィ）

欠伸を噛み殺し、旧介は心地好い布団から、嫌々ながらも這い出る。
明るさにも目が慣れてきたようで、部屋全体を緩慢に見回すと、慌ただしく動き回る影が視界に映り込む。

身長はざっと見たところ高い。坊主のように頭を丸めた大男は、旧介が起きたことに気づいたらしく、早足でこちらに駆け寄った。
鋭く小さな目と、大きな鼻、そして何より口から頬まである大きな傷が、もとより恐ろしい雰囲気を与える男を、余計に強面にして

いる。

その厳つい男が目前まで迫ってきても、旧介は涼しげな顔を崩さなかった。男の威圧感など旧介には何の意味も持たないからだ。

「大将、あんた今日……あの仕事の日なんですよ？分かってます？」

「……あの仕事？」　意味が分からないといった顔をしている旧介を見てから、男は大きな肩をがくりと落とした。その顔には「ああやはり」と書かれている。旧介がこの件を忘れているだろうことは、半ば予測していたらしい。

「仕事ってなに」

「……ホラ、鬼切りますとか言ったじゃないですか」

「ああ、そういやそんなことも」

「アンタねえ……」

呆れたとばかりにため息を落としてから、大男は「どうなっても私は知りませんからね」と早口に述べる。

その腕には先ほどまで旧介が眠っていた布団が抱えられている。どうやらおまけに布団も片付けておくようだ。いったいいつの間に、と驚く旧介に気付かないまま、大男は続けた。

「あ、でも金はちゃんと分けてくださいよ。いや、本当に」

言いたいことは言ったと、大男は満足げに笑った。そのずる賢さに旧介が冷えた視線を送れば、一転して彼はさっと表情を青ざめる。

そして、旧介が何か言う前に、逃げるようにして男は隣の部屋へと走り去っていった。

その無駄な逃げ足の速さには、いっそ称賛の言葉を送ってやりた

いものだ。

（……それにしても）

床は畳。あるものは箪笥と小さな机が一つのこぢんまりとした部屋、ここは旧介の部屋である。

嗅ぎなれた伊草の匂いにぼんやりと浸かりながらも、旧介は部屋で一つしかない窓から顔を出した。

外は、暑すぎるわけでも、寒すぎるわけでもない、程よい気温である。

青い空を何とはなしに見れば、直ぐに視界の中に灰色をした物体が映り込む。無意識のうちに、旧介は顔を歪めていた。

そこには壁があった。巨大な、天に向かってどこまでも伸びているような、そんな壁だった。

この世界には、『鬼』と呼ばれる化け物がいる。

鬼は人間の天敵と云われてきた。何故なら、鬼の好物は人間だからだ。しかも、鬼は簡単に殺すこともできない、まさしく化け物といってよい存在である。人間はただ食われるだけであった。

しかし、ある科学者が鬼についての可能性を提示してから、化け物としての鬼の見方ががらりと変わる。

その可能性は大きく分けて三つある。

一つ。

鬼には高い知能を持つものがいる。

その中の大半の鬼は、人間と『契約』を結ぼうとする。

何故、鬼が人間と契約をしたがるのかは今のところ分かっていな

い。

契約を結べば、鬼は人間に力を分け与える。その能力の種類は千差万別だ。しかし、それはこれから何年、何十年と人間が進化したところで、確実に手に入れることのできない力である。

とはいえ、この契約はメリットばかりではない。当然だ。メリットの裏には必ずデメリットが存在する。

契約した人間の命は鬼が管理する。簡単に言えば、鬼は好きなときに契約相手を殺すことができるのだ。

また、契約者がその規約を破ってしまえば、ペナルティーが執行される。その内容もバラバラだが、生き残れる可能性は限りなく０に近い。

つまり、契約してしまえば、鬼に殺される未来は確定事項になる。しかし、それがあっても、異能力というものは人間にとって魅力的であった。

たとえ、それがどんなに愚かで、馬鹿馬鹿しい選択であっても、だ。

二つ。

鬼の持つ力と科学を合わせることで、今まで実現不可能だったものを開発することができる。

たとえば、空を飛ぶ車。たとえば、一定の場所から場所まで行き来ができるワープゾーン。

科学の飛躍に鬼は役立つという可能性である。

三つ。

一つ目の能力を持った人間だけで、部隊を作ったとする。それはただの人間とは段違いに強いものになるだろう。

確実な軍事力を簡単に手に入れることができるのだ。

科学者が提示した『鬼の可能性』はこれが全てだ。

最初は馬鹿な話だと人々は罵ったらしい。しかし、鬼のおかげで国が発達し、便利になると、人々の反発は目に見えて消えていった。

こうして人間と鬼は切っても切れない関係となる。

しかも、この話はずっと昔の出来事であった。つまり、何百年もこの国は鬼に怯えながらも、共に歩いてきたことになる。

とはいえ、鬼が人を食うことに変わりはない。それに抵抗しようとしたところで、人は鬼に触れることもできず、無様に死ぬだろう。

鬼と人との間には、絶望的なまでの差があった。

それに加え、勝手に鬼を退治することは有罪だ。

鬼の殺生は、政府公認の『ジョーカー』と呼ばれる免許を持つ人間しかできないことになっている。

しかし、いざジョーカーを雇って鬼を退治してもらおうと思っても、そうスムーズには行かない。依頼料として金が必要になるのだ。貧しい人間には一生かけても出せないだろうほどの、馬鹿げた大金が。

それほどに鬼退治は危険を伴う。しかし、だからといって、貧乏人は喰われて死ねというのは、あまりに酷すぎる話だろう。　政府もそれを考慮し、この国をぐるりと囲む大きな壁を建てた。

鬼は外に生息している。つまり、外からやって来るのだ。その侵入を少しでも拒むために、壁を造った。

その成果あってか、鬼の事件はひとまず減少する。しかし、全てが無くなるわけではなかった。

もともと、鬼が関与する事件は非常に多かった。それがようやっと少し減っただけで、実際にはあまり違いは無いのだ。

それでも、この国に鬼はどうしても必要な物になってしまった。今更そう簡単に切り離すことなどできるわけがない。

（それは、やけに笑える話だ）

旧介は、灰色をした壁を眺めながら、皮肉げに笑った。見ているだけで苛立たしくなる、そんな笑みだった。

鬼は敵だ。

にも関わらず、その敵がいなければ、もう人間は生きていけなくなってしまった。喰われて、いいように扱われて、殺される。家畜にでもなった気になる。いや、実際、家畜と今の人間はそう変わらないのかもしれない。

ハア、と、息を吐く。

旧介の受けた仕事は、その鬼を殺して欲しいというものだった。

「鬼退治とか……すげえ久々だな。まぁ、金がねえから仕方ないけど。金貨何枚貰えるって約束だったかな」

「確か3枚だったと思います」

「あー3枚かぁ。奮発してくれるねえ」

「香宮（こうぐうじ）司くんが嬉しそうで私も嬉しいです。ところでまだ出発しな

いんですか？」

おっとりとした、可愛らしい声だった。そして、旧介が今まで生きてきた中で、一度として聞いたことのない声であった。

付け加えるなら、この家に住んでいるのは、旧介と先ほどの大男だけだ。

つまり、誰かも分からない相手が部屋におり、旧介と呑気に会話していることになる。

（まじかよ、泥棒か？）

そうして、恐る恐る声のした方向に振り向けば、そこには少女が立っていた。

薄い橙色をした短い髪に、それより濃い色を持った大きな目。水色をした清楚なワンピースから覗く肌は、透けるように白い。

綺麗な少女だった。

そして、その少女は何故か顔を赤くさせ、唇をだらしなく引き下げていた。また、吐き出す息も荒く、ハアハアという呼吸の音がはっきりと聞こえる。

言葉は悪いが、変態にしか見えなかった。

（誰だよ。……何でハアハアいってんだよ、何を盛り上がってんだよ……）

突然の侵入者に旧介は言葉が出なかった。というより、この状況で愕然としない人間がいるだろうか。いや、いるわけがない。

何も言えず、ましてや、動くことなど余計にできないまま、旧介は少女を呆然と見つめていた。
そして、その視線に、少女は赤い顔をまた赤くさせる。
（え、なに、こいつ）
はたから見ていると、申し訳ないが気持ち悪い。もとより表情豊かというわけではない旧介は、その感情が表に出なかったことに小さく安堵した。
しかし、このままでは埒が明かない。旧介は舌を縺れさせながらも、何とか声を吐き出した。
「……お前、なに？何で僕の部屋にいるんだ？というか、金貨の話をどうして知ってる？」
「ま、待ってください！順番に説明します、しますから……あの」
「なんだよ」
旧介の質問責めに、少女は慌ただしい声を上げた。白く細い指先はカタカタと小さく震えている。また、大きな目は今にも涙が出そうなほど、揺れていた。
その姿は小動物によく似ている。まるで自分が虐めているような錯覚に囚われ、旧介は黙り込んだ。
少女は困惑しているようで、目をあちらこちらに忙しなく動かしている。握り込んだ手を一段と強く握り、少女は目を閉じた。
「落ち着け、落ち着け、大丈夫だから」そうやって自分自身に言い聞かせるように言葉を繰り返し、少女はとうとう目を開けた。

先程とは打って変わり、落ち着き払った眼差しは、どこまでも真っ直ぐに旧介だけを見ている。

少女は大きく息を吸い込み、そして、言葉を吐き出した。

「私、あなたのストーカーです。大好きです。付き合ってください！」

それまでの雰囲気が、ガラガラと音をたてて崩壊していくのを感じながら、旧介は渇いた笑い声を上げた。それしかできなかった。

予想外にも程があるだろう。旧介を幸せそうに見つめる少女に、旧介は笑いかけた。

「黙れ変態」

少女はそれでも微笑んだままであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8951z/

ジョーカーな狐と狸さん

2011年12月29日02時46分発行